

九、保險制度の休養期間への延長

說明

傷病治療による診療打切りは必ずしも労働可能、作業場への復帰を意味せざるを以て、此の兩者間に休養期間を設け茲にも保險制度を延長すること

一九三九年獨逸の婚姻、出生及死亡

統計の發表

昨一九三九年に於ける獨逸の人口動態の集計結果は全國統計局機關誌 Wirtschaft u. Statistik 1940 Nr. 9 に發表されたが、一九三三年ナチス政權確立以降その出產減退の國民的危機を克服して驚異的な回復傾向を辿り來つた獨逸は昨年亦引き続き好調を持續してをり、特に獨逸へ歸屬後の舊オーストリー、ズデーテン獨逸地方等に現はれた未曾有の出產増加の如きは世界の識者をしていよ／＼矚目せしむるに足るものがあるといへよう。其の主要統計は別掲の如く、之に對する全國統計局の附帶的説明の大意を摘記すれば以下の如くである。

婚姻に就いて

一九三九年に於ける全國婚姻數の未曾有の増大(前年に對し一七四、八二一件増)は、一つは獨逸への歸屬後に現はれたオーストマルク(舊オーストリー)及ズデーテン獨逸地方に於ける顯著な婚姻増加に依るものであるが、之と共に開戦以來とり結ばれた多數の戦時結婚に依る所も多い。七・八・九月中にも前年同期に比し著しい増加を見せてゐるが、更に十・十一・十二月中には對前年同期に對し實に三五・七%の増加となつて

一九三八	九〇、〇二二	九四、三六四	二、四六九	九四、九九二	七、三七六	(-)	六〇八
一九三七	四六、三〇八	八六、三四二	二、四四七	八九、九五八	七、九三八	(-)	三、七二六

舊オーストリーの一九三七、八、九年に互る人口動態(人口千に付)

婚姻率

出生率

死亡率

自然増加率

乳幼児死亡(出生百に付)

一九三九	一七・七	二〇・九	一五・三	五・六	七・四
一九三八	一三・四	一四・〇	一四・一	〇・一	八・三
一九三七	六・九	二二・九	一三・四	〇・五	九・二

(1) 現在オーストマルクとよばれてゐるが、現行政區劃としてのオーストマルクはズデーテン獨逸地方の一部を加へてゐる。
(2) 一九三九年九月一日以降の戰死數を除く。

ズデーテン獨逸地方の一九三〇―三九年度の人口動態(人口千に付)

婚姻率

出生率

死亡率

自然増加率

乳幼児死亡(出生百に付)

一九三九	一四・五	二二・九	一三・八	八・一	六・九
一九三八	八・一	一四・二	一二・九	一・三	八・九
一九三七	八・四	一四・二	一三・二	一・〇	九・七
一九三六	八・〇	一四・四	一三・〇	一・四	一〇・三
一九三五	七・六	一四・七	一三・三	一・四	一〇・七
一九三四	七・六	一五・六	一二・八	二・八	一一・〇
一九三三	八・五	一六・〇	一三・四	二・七	一一・六
一九三二	八・六	一七・五	一三・三	四・三	一一・九
一九三一	八・八	一八・四	一三・八	四・六	一二・〇
一九三〇	九・四	一九・四	一三・六	五・七	一二・八

(1) 現行政區劃に於ける Reichsgau Sudetenland は所謂ズデーテン獨逸地方より小き。
(2) 一九三九年九月一日以降の戰死數を除く。

ある。殊に現在結婚最適期に在る一九一〇年生れの男子が全國で約七十五萬を算するに過ぎないことを考へると此の婚姻著増の事實は更に注目し得る。平時に於ける男子の結婚率は其の約九〇%と見做されてゐるから、假令死離別男子の再婚を加算しても、三九年度の婚姻件数は平常時に豫期される數を二十萬も超えたことになる。而かも一九一五——一九一〇年生れの男子數が一九一〇年出生男子數より更に遙かに尠いことを考慮に入れると、豫期の超過は二十萬どころではない。この未曾有の婚姻數は確かにオストマルク及ズデーテン獨逸地方で今まで繰り延べられてゐた結婚の大最成立と、全國で取りいそぎ行はれた多數の戦時結婚とが同時に惹き起した一時的現象で、さう永續性をもつたものでないことは婚姻適齢人口の涸渇が生む將來の反動に際して誤解の生じない爲にも注意しておく必要があらう。併し今日までの所では猶ほかゝる傾向は認め難く今年一・二・三月中の婚姻件数は昨三九年度同期に對し尙四二・四%の増加を見せてゐる。

一九三九年度の婚姻統計を特に舊獨逸領内に就いて見ると、前年に對し一二七、七四三件の増、また嘗て異常な婚姻數(七四〇、一六五件)を示した一九三四年に對しても約三三、〇〇〇件の増加となつてゐる。而かも當時の婚姻増加は之に先立つ恐慌期中から繰りこされてゐた結婚の取りもどしに依るもので婚姻階級人口の過剩に因由するものであるが、昨三九年度の婚姻増加は之に先立つ六ヶ年間の婚姻増加に引き續くものであるのみならず、現在結婚最適期に當つてゐる一九一五——一九一〇年生れの者の特に尠いことも前述の如くである。それにも拘らず前三九年初頭以來最初は僅かに

ではあつたが兎も角漸増の傾向(前年同期に比し前半期中に一〇、一二二件増)を示してゐるのは國民大衆を潤はした經濟的好況が尙引き續いて上昇傾向をとつてゐたことを證據立てる。後半期には前年同期に對して實に一一七、六二二件の増加で、若し戦争の勃發がなく後半期の對前年増加數も前半期同様と考へてみると舊獨逸領内で約一〇八、〇〇〇件の戦時結婚があつたと看做してよいことになる。尙、この舊領土内の婚姻統計を地域別に見て興味を惹くことは、ズデーテン地方の併合によつて邊境地域としての危險性を解消した地方に特に増加の顯著なことである。

オストマルクは合邦以來その婚姻數を著増してをり、既に一昨三八年は前三七年に對し二倍の婚姻率を示すに到つてゐるが、昨三九年も亦この著増傾向を持續してゐるのは別表の如くで、三八、九年合計の總婚姻件數は舊オストリー治下の最後の四ヶ年年半に互る總婚姻數に匹敵してゐる。この事實こそ獨逸合邦に對するオストマルク住民の心からなる賛意と、竝に同地方經濟の迅速なる復興を證明するものに外ならぬ。

獨逸合邦の半年後本國へ再歸せるズデーテン獨逸地方、では其の婚姻増加はオストマルクには及ばないが、それには又同地方にオストマルクに見る如き大都市がないといふ事情にも依るところが多い。(因にワイーン縣の婚姻率は人口千に付二二・一で、オストマルクの婚姻増加に尠く劣るところ極めて多い。)蓋し農村や小都市の住民は大都市の市民ほど直接に生活環境に左右されるゝことがなく、事情さへ許せば一般に極めて早く結婚してふと考へられるからである。併し同地方の婚姻率はオストマルクの農村地方の其れと較べれば全

く同じ水準に立つてゐる。

出産に就いて

一月以降上昇傾向を辿つてきた昨三九年度の出生増加は最後の三ヶ月殊に十一月に弱勢を見せるに到つて最終期待せられてゐた年總數を實現するには到らなかつたが、この弱化は昨三九年一・二・三月中の流行性感冒の蔓延によるもので、既に今年一月には昨年同月に比し一一・八%増の出生數を示してをり、今年一・二・三月中の諸大都市の報告も同様の増勢を語つてゐる。

舊獨逸領内に就いて見ると、昨三九年度出生數の對前年増は六〇、五七九で、一昨三八年の對前年増六九、八五六の數字と共にナチス人口政策の効果を確證するものである。この出生増加の一部は三七、八年中の婚姻増加にもよるには相違ないが、根本に於ては各人當りの出産頻數の上昇に基くものとすべきで、唯その精確なる檢證は今のところ尙不可能である。之を出生率に見ても別表所載の通りで、去年底に落ちてゐた一九三三年に比較照合して隔世の感を抱かしめる。尙、この出生率上昇を地域別に見ると、一九三三年に最悪の状態にあつた地方が必ずしも豫期せらるゝ如き最も大幅の回復を見せてゐることにはならず、寧ろ嘗ても高率の地方が其の後の躍進率に於ても亦著しいことが目立つ。また之を南部及北部獨逸人の區別から見ると、確かに北獨逸の方に躍進度は顯著だが、併しそれは北獨逸の大都市及工業地帯が一九三三年以降莫大な労働青年層を吸収せるが故で、南獨逸にあつても之に類する處にはやはり總平均以上の躍進度を示してゐる。總じて工業地方は平均以上の躍進度を示し、農村地方

は平均以下になつてゐるといへよう。

オストマルク及ズデーテン獨逸地方は昨三九年を以て其の出産統計に劃期的なる好轉を示すに到つた。

オストマルクでは合邦後間もなく、特にウィーン縣に、出生數の漸増を見せた。これは寧ろ墮胎その他の

幼児處分の減少の結果と考ふべきものであるが、併し一昨三八年十二月の最後週及昨三九年一月中には出産

數の著増が認められ、この傾向は三九年を通じて中斷せらるゝことなく繼續した。三九年中の出生數は前々

年三七年に對し六一%の増加で、この増加割合が一九三三年以降の舊獨逸の其れよりも大きいことは出生率

の比較に見るも明瞭である。尙、著増したとはいへ未だ低いウィーン縣の出生率(一五・三)は、同縣がオス

トマルク總人口の約三分の一を占めてゐる關係上オストマルク總平均の出生率をかなり低めてゐるわけで、

其他の諸縣は平均出生率を遙かに抜いてゐる。

躍進の顯著なズデーテン獨逸地方も一昨三八年の出生率が一九三三年の舊獨逸の其れより更に低位にあつ

たことは合邦前のオストマルクと同様である。獨逸への歸屬(二八年十月)に因由する出生増加は三九年後半

期までは現はれて來ないわけであるが、既に三九年の出生増加は前年に對し四一・三%に及んでをり、之と併行して出生率の高上も亦著しい。

一九三九年の出生過不足

更に昨一九三九年の出生數が國家的最少必需量を充足してゐるか如何かを検討してみるに、二十歳男子の數を昨三九年同様に將來も維持してゆく爲めには全國(オストマルク及ズデーテン地方を含む)で毎年一、六

四〇(千)の出生數が必要で、メーメル地方及舊ダンテヒ自由市を加へるとこの數字は更に一、六五二(千)となる。之を全國(舊波蘭領の東部地方を除く)の總人口七九、九二四(千)に割り當てると人口千に付二〇・七の出生率を必要とすることになる。

この一、六五二(千)の要出生數を(昨年の國勢調査による年齢構成状態は未だ利用不可能ゆゑ)總人口の割合で振り當てゝみると、舊領土内へ一、四三三(千)、

舊オーストリーへ一三三七(千)、ズデーテン獨逸地方へ七〇(千)となり、出生率は夫々一樣に二〇・七となる

ことになるが、之を昨三九年の實數と比較すれば、舊獨逸領内の出生總數は其の最少必要數に對し僅かに

一・八%の不足、オストマルクは之を完全に充足、ズデーテン獨逸地方は必要數を四、七〇〇も超過してゐる

ことになる。舊ダンテヒ自由市も同じく超過剩餘を示し、その出生率二二・二は一・五も要出生率を超える

ことになる。要之、最近までは出生過少に悩んでゐた

これらの諸地方は獨逸への歸屬後その出生剩餘を以て本國を支援する状態になつたわけである。それ故に全國

總計に於て見るならば出生數の不足は僅かに一九、〇〇〇即ち一・二%に過ぎないこととなる。

勿論このことは今後もこの最小必要量が確保される

といふことを意味するわけではない。出産數の僅少だつた一九一五——一九一八年生れの者、更に成績の悪かつた二二——三三年生れの者が結婚適齡期に達する頃の

最適離婚者數の減少は豫期せらるゝ所であり、之に現下の戦争に伴ふ影響も亦考慮せねばならぬ。孰れに

せよ今後に其の減少を豫期せらるゝ最適離婚者數を以て年一、六五二(千)の出生數を維持しようとするには

各個當りの出産頻數を少くとも現在より一六%高めることが必要で、この比率は今次動亂の擴大程度や獨逸今後の必要とする人的資源の程度如何によつて更に多少の増加を必要とするだらう。

死亡に就いて

一九三九年の死亡に就いては年初頭の流行性感冒による死亡増の後は完全な好調を示してゐるが、高年齢者の漸増と出産の著増とは或る程度の死亡増加を結果してゐるのは止むを得ぬ。人口一萬五千以上の市町村合計の主要死因別統計は別掲の如くで、之によつて見ても流行性感冒の蔓延(流行性感冒、氣管支炎、肺炎)高年齢者の増加(老衰、心臟病、癩、糖尿病、腦卒中)及び出生増加(乳幼児死亡)が昨三九年の死亡増の三原因たることは明かだ。その少くとも七〇%は之に歸すべきであらう。其の他の點で國民的健康並に醫療狀況の良好であつたことは結核、盲腸炎及び産褥熱による死亡減に見ることが出来る。乳幼児死亡の總數は出生増加に伴ひ増加してゐるが、率からいへば前三八年と同じであり、流行性感冒蔓延の年頭初を除けば四月以降は前年よりも好成績を示してゐる。

死因

人口一萬五千以上市町村總計の主要

死因	死亡數	人口千に付
チブス	一九〇	一・九六
麻疹	五〇〇	五・〇〇
猩紅熱	三〇一	三・〇一
百日咳	七六	〇・七六

チフテリア	三三六	二九六九	一一	一一〇
流行性感冒	五九七	二八〇三	一八	〇九
結核	一八一	一八五七	五七	五九
癌及悪性腫瘍	四八三	四七五七	一五三	一五三
腸病	六三九	六三五四	二一	二〇
糖尿病	三〇七	三〇四三	九七	九八
脳卒中及癱瘓	三〇七	三〇四三	九七	九八
心病	五五二	五二八〇	一七九	一六六
氣管支炎	四七三	三八五九	一五	一三
肺炎	二八〇	二四九四	八八	八〇
盲腸炎	一九七	二一三〇	〇六	〇七
腎臓炎	五三九	五七三	一七	一八
瘧疾その他	一八七	一八九七	三三	三六
妊婦及産婦中の不慮の傷害	二七四	二四八六	八八	七九
老衰	二七四	二四八六	八八	七九
自殺	八九六	九二二七	二八	二九
他殺	二九三	二八六	〇一	〇一
不慮の傷害	二二七	一〇四三	三七	三四

一歳未満の特殊死因

早産	七四四	七四三三	一三四	一四二
先天性畸形	九三二	八九〇六	一六七	一七一
賢及分娩による産児の傷害	三二九	二四七四	五九	四七
腸カタル	一〇七	三三	〇三	〇一
毒	一〇七	三三	〇三	〇一

(1) カルルスルーエ、ビルマーゼンス、ツワイブルネッケン及ザール地方の市町村を除く。

(2) 出産(出生及死産)千に付。

(3) 出生千に付。

オストマルク及びブズデーテン獨逸地方に於ける死亡増も全く舊獨逸の其れと同様で、たゞ後者に死亡總數の減少を見るのは大量の労働人口が舊獨逸へ移動せる

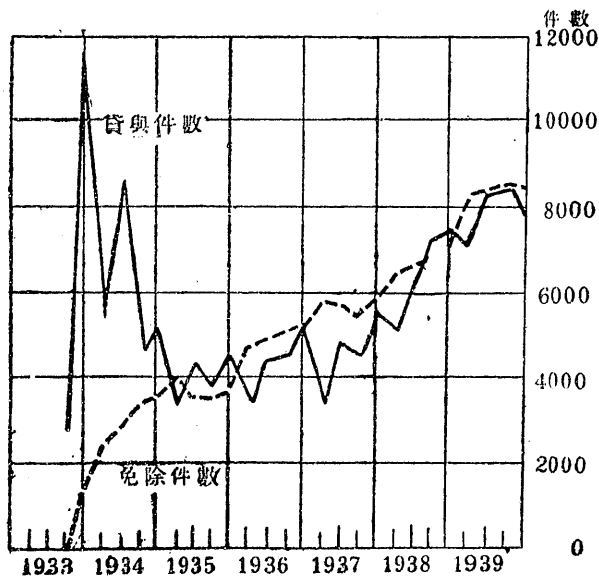
による。なほ兩者共に乳幼児死亡率の低下は顯著である。

一九三三—三九年間獨逸の結婚資金
貸與及其の償還免除件數の集計

結婚資金貸與制度は一九三三年六月失業救済策に兼ねて施行されたナチス政府最初の人口政策の一つであるが、一九三三年—三九年間の資金貸與件數及規定により出生児一人に付其の四分の一の金額を棒引される償還免除件數の集計は Wirtschaft u. Statistik 1940 Nr. 5/6 に發表さるゝ所に依れば次の如くである。

資金貸與件數	一九三三	一四、五五九
舊獨逸内	(八一二月間)	一四、五五九
新獨逸内	一九三四	三、四六九
計	一九三五	一五、〇二八
資金貸與件數	一九三六	一七、四六〇
舊獨逸内	一九三七	一八、五五六
新獨逸内	一九三八	二四、三六一
計	一九三九	二七、〇九一
償還免除件數	一九三三	一、四四五、八七七
舊獨逸内	一九三三	一、三六一〇
新獨逸内	一九三四	一、二九、九六一
計	一九三五	一、五五、〇六一
償還免除件數	一九三六	一、八六、六九四
舊獨逸内	一九三七	二、三三、五三三
新獨逸内	一九三八	二、七三、五六〇
計	一九三九	三、一〇、五九九

一九三九
計
三、一八、八二〇
一、三三、八九〇
三、三二、四六三



獨逸 D A F の多子家族生計費調査

一家の収入は子供數に比例して増加するわけではなく多子家族は種々の節約による以外に之が對策を有つてゐないが、多子家族の増加支出と支出節約とは果して如何なる點に行はれてゐるかを調査することを目的として Deutsche Arbeiter Front の労働科學研究所では一九三七年の労働者家計調査の結果を集計してこの方面には先例のない多子家族の生計費調査を完成した。併し新しい試みにつきものの多少の缺陷は致し方なし